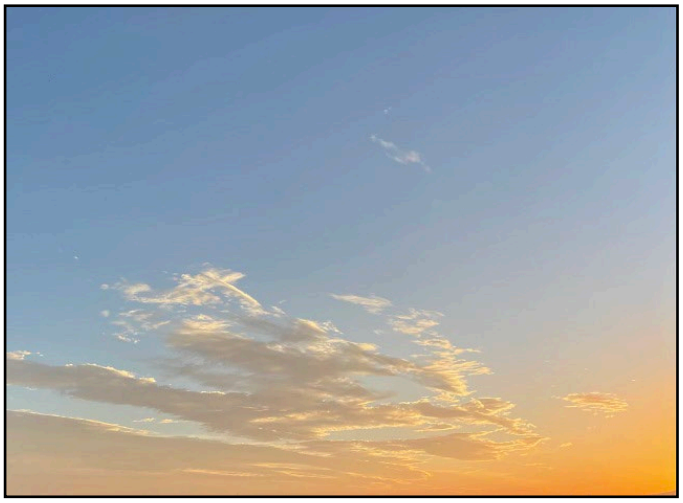
Community & Friend
2026 年 11 月号
有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎
過去の月間通信は https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 11 月号をお送り致しました。



ほとんどの人が見ている計算式がある。
$E=MC^2$
仕事でエネルギー量の値を求める時に使う事は、多分日常的に発生するのだろうと思う。世の中は然程単純では無いが、数学上は私同様とても素直で、現れた数値に揺らぎは無い。この式が出来てから、幾日経過したのか知らないが、私たちが学校で習って来たイコールで結ばれた数式は、『イコールの記号の右と左が同じ値を持つ』だった。数量の値が、つまり数字が同じだという算数から始まった。

$(9^2-8^2)-(8^2-7^2)=2$ この式は、車の移動中に発見した。あまりに渋滞していて、ふと隣の車線を見ると、惚けた顔の運転手がいた。相手から私を見ても同じような顔をしているのだろうと思うと、何だか嫌になって来て、そこから逃れたくて、法則をもった数字の並びを考えようとした。というのも、小学校 1 年生の春、最初にテストと云うものに出会った時の設問が、前後の数字の関連から、空白の升目になっている位置に、適切な数字を入れる問いで、とても想像力をかき立てられた。

先の式から **1** 下がった **$(8^2-7^2)-(7^2-6^2)=$** も当然、**2** 。ここまでは、前述の通り数の量、数字の話しであるが、これがどんな数を当て嵌めても、答えは **2** となるのかを証明したくなり、**$((n+1)^2-n^2)-(n^2-(n-1)^2)$** が **2** であると、計算結果を示せば良いと考えた。だから、これを暗算で遣ろうとした。多分、小学生の頃のフレッシュな頭であれば出来たと思うが、何せ 40 を超えていたと思うので、如何せん海馬がそこまで記憶を留めていてはくれなかった。仕方なく、会社に戻ってから Excel を使った。
$((n^2+2n+1)-n^2)-(n^2-(n^2-2n+1)$ の計算は、前半部分は、2n+1 が残り、そこから後半部分の (2n-1) をマイナスすれば良いだけだから、**2** が確かに残る。『自然数ならば』という条件を仮に付けておくことが無難だと思うが、これで、式として成り立つ訳だが、数字ではなく **n** という、何ていうのかすべての自然数という性格を、帯びた文字を持ち出して来る事が始まった。ちなみに **n** が 1 であっても、成立した。式の左を X 軸にし、右を Y 軸にグラフを採ると、Y の値が **2** ところに点が並ぶ。点である限り 0 次元だが、この点を結ぶと線になり 1 次元となる。次元は連続で並べるとひとつ上がる。もう少し遊ぶと、式の最後に **"+2n"** と、加えると **Y** 軸を **2** つ『飛び飛び』で進む。つまりこの飛び飛びをもう少し大きな目で見て、連続させると線が連続して、面となり **2** 次元となる。ここからは数式が追い付かないが、ひとつの面を中心に其の各辺に同じサイズの面を **4** つ置いて、**90** 度起こすと、立方体の箱が出来、3 次元が誕生して、此処を便宜上私たちが生きている次元だとしている。冒頭の『然程単純ではない』だが、**2** 進法の中の奇数を **micro** の話しと無視しているところが、実は私たちが棲んでいる世の中になる。この表現を借りれば、奇数同様無視できない **micro** の要素を無視しているのが、私たちの世の中になる。

私たちは『そんな細かい事に構っていられない』と無視しているのが常だが、実は無視できない影響を受けている。『そんな細かい事は』と表現するなら意識として存在を認識している。存在を認めながら、にも段階が言葉の上でもあり、無頓着と無自覚がある。国語的に言えば、どちらも一人称の範囲で、二人称や三人称となるともう少し話しは変わり、少しは客観性を帯びてくる。客観性とは事実の話しで、科学の話しでもある。私たちのビジネスは、**1+1=2** であるが **2=1+1** とは限らないという **micro** な世界で成り立っている。2=0.5+0.3+1.2 ように、足して 2 になる組合せは無限にある。無限にあるにもかかわらず、無頓着に 1+1 だと思い込むと、ビジネスは時間と共に衰退していく。もっと言うと、かつての 1+1 のそのどちらかの 1 が僅かでもプラスであれば良いが、マイナスになってしまっている場合もある事に無自覚になると、酷い目に合う。おそらく、物理学の世界でも、研究の方向性は脳の出来次第ではなく、もっと次元の違うセンスの要素が多いのではないかと思う。では、センスとは何か。それは、先月書いた通り物理学は、自然科学を解き明かす問いを、作っては答えを導き出し、学びを重ね合わせる連続性だとすると、センスは、自然を観察し、如何に会話が出来るかにかかっているような気がする。

今、隣で娘が唄を歌っている。♫本当は空を飛べると知っている♪　と。本当に空を飛べるかどうかは、見え方次第だと思う。私たちの身体を形作っている原子は、元々空どころか宇宙の彼方からやって来ている。何かの拍子に、その彼方の中にこの惑星が形を為し、そこから水素が誕生して、炭素原子が生成されて以来、その結合上の都合で生命という摩訶不思議が存在を許されている。先日訪問したトマトの農家は、macro と micro の境界線は何処にあるのかというような事を言っていた。なるほどと思ったが、人間の五感に触れる範囲がその境界線と応えた。今少し考えてみると、実は 2 次元的にも 3 次元的にも、方向があるような境界ではなく、陰陽の法則のように macro が極まれば micro となり、またその逆となって一対の状態として存在しているのではないかと思う。

一対の状態とすれば、区別は無く、$e=mc^2$であれば、$mc^2=e$ で、光は質量をもった物質として変換可能だと考えても不思議はない。数式というのは決して一方通行ではない。でなければツールとしての数学は成立しない。という事は、論理的には極めて稀な状況を作れれば、光と光をぶつければ質量をもった物質になる事になり、この実験を繰り返しているところだそうだ。Google に聞くと、**:** 衝突のエネルギーが電子の質量に対応する閾値を超えると、光が消滅して「電子」と、その反粒子である「陽電子」のペアが生まれます**:**と応えて来る。この応えは、ふたつ要点があり、『閾値』と『陽電子』。前者はその内として、電子は通常マイナス電荷を帯びていると思われてきたが、実は核の奥底にはプラスに帯電している電子も潜んでいるらしいし、どちらでもない、『中性子』と呼ばれるものまであるらしい。中性子爆弾と聞いた事があると思う。想像だが、数式が 1=0.650+0.340 のような、足しても元の数字にならない分裂をして、その足りずが、莫大なエネルギーに変化して爆発する原理が核分裂らしい。つまり、物質がエネルギーに性格を変える事で、『保存の法則』を保つ。そうすると、0.650+0.340=1 の式も成立する訳で、その時発生する、足りずが、エネルギーになり、こちらは核融合という事になりそうだ。おそらく、原子力発電装置が家庭に普及する時代が来るとは、こちらの核融合に依る発電を指しているのだろう。

ここでひとつ頭に入れておかなければならない事がある。それは、質量を持たない物質があるとは、0=-1+1 という式を想定する事だろうと思う。念押しだが、書いている事は、今私たちが置かれているビジネスの手法の話しに他ならない。何故なら、私たちが生息しているところは、macro と micro の境界の無い物理世界に過ぎないから。無自覚・無頓着から離れて、自然界の物理法則を、陰陽五行と括ろうと、波動に依る実践エネルギーシステムと括ろうと、需要には法則があり、それは常に言葉にならない、数式化さえ覚束ない情報として私たちを取り巻いている。ひとたび switch が on になると、瞬く間に波として伝わって来る。

有限会社アルファー　吉田清一郎